3　「要約+考察型」レポート

■　「要約+考察型」レポートとは――文献を読んで内容を要約し、それに考察を加える。ブックレポート（書評）など。
■　内容――文献の要旨と、それに対する見解、批判的検討。
■　目的――文献の内容とその到達点・限界を理解していることを示す。
■　課題の例――「○○を読み、内容を要約したうえで自分の考えを述べなさい。」
■　文字数――1,200～2,000+字程度。
■　手順・構成

(1)課題を理解する

■　レポート課題の指示をよく読み、どのような形式で何を書くことが求められているのか理解する。
　・　提出期限、文字数、ページ設定、記載事項、表紙の有無など。
　・　内容についての指示や注意事項もよく読んでそれにしたがう。

(2)資料を集める

■　テーマの概要を把握する。
　・　インターネット検索で課題文献が扱っているテーマの概要を知る。
■　図書館などで課題文献と関連資料を入手する。
　・　課題文献や課題テーマが発表されたら、早めに図書館などで確保する（他の受講者も同じ本を入手したがっている）。
　・　課題文献だけでなく、同じテーマを扱った文献をいくつか見つけておく。
　　・　あまり馴染みのないテーマであれば、ブックレットや新書、入門書が参考になる。
　　・　同じテーマについて異なる立場から論じているものを見つけられると、考察部分を書く際に役に立つ。

(3)資料に目を通し、情報を整理する

■　要約する文献を精読する。
　・　意味段落の構成や、中心文と支持文の関係を意識して、文章の要点を捉える。**【文章表現編】1～3**
　　・　目次や見出しも参考に。
　・　線を引き、書き込みをしながら、またノートをとりながら読む。※図書館の本には書込み禁止！
　　・　中心文と重要な支持文に線を引く（中心文と支持文とで、線の色や種類を変えておくとわかりやすい）。
　　・　疑問に感じたところ、おかしいと思ったところ、強く共感したところにも書き込みや線引きをしておく。
■　考察のための視点を考える。
　・　書き込みやノートを見返して、考えを整理する。
　・　参考文献を読んで、異なる視点からテーマについて考えてみる。
　・　問いを立て、論点とそれを支える根拠を考える。**【発想・着想編】1～8**
■　レポートの構成を考える。
　・　「(4) 書く」の構成を参考に、どの部分にどの情報をどの資料をもとにして入れ込むのか、構成（アウトライン）を考える。
　　【構成編】2　レポートの基本スタイル、8～9　アウトライン〔構想〕を立てる

(4)書く

I.　はじめに（序論）（10%くらい）**【構成編】3　序論の組み立て方**
　・　どのようなテーマのテキストなのか。
　・　考察のポイントは何か。どのような結論を導き出すのか。
　・　このレポートではどういう手順で議論を展開するのか。

II.　要約と考察（本論）（全体の 70～80%くらい）

パターン1　要約1→要約2→要約3→考察1→考察2→考察3

要約（全体の 30～40%）**【文章表現編】2～3**
・　文献の流れに沿って内容を要約する。中心文を見つけて自分のことばで言いかえる→必要情報を盛り込む。

考察（全体の 30～40%）
・　著者の主張・論点のうち、重要と考えるものを 2～3 点取り上げる。
・　それぞれについて問題提起を行い、自分の主張を根拠とともに提示する。

パターン 2　要約 1→考察1→要約 2→考察2→要約3→考察3

課題文献で述べられていたことを 3 つくらいの点に分ける。
第 1 の点を簡潔に要約。論点を指摘し、自分の考えを根拠とともに述べる。
第 2 の点を簡潔に要約。論点を指摘し、自分の考えを根拠とともに述べる。
第 3 の点を簡潔に要約。論点を指摘し、自分の考えを根拠とともに述べる。

III.　おわりに（結論）（全体の 10～20%）
　・　なにを取り上げ、どのような考察を加えたのか。
　・　鳥瞰的な評価、今後に残した課題など。

(5)チェックする

■　原稿を読み直し、誤字・脱字がないか、また文体や文章表現、構成などは適切か確認する。
　レポート・ライティング 10　最終原稿チェックリスト

「要約+考察型」レポート　文例

○○○○論（○○○○先生）

直接対話とインターネットを介したコミュニケーション
――「ネットワーク社会のコミュニケーション」の分析から

提出日　20○○年○月○日
○○学部○○学科○○専攻 1 年
学籍番号 14○○○○○
○○○○

表紙をつけない場合には、1枚目の冒頭に科目名、担当教員名、タイトル、提出日、所属、学籍番号、氏名を書く。記載事項の指示がある場合には、それに従う。表紙をつける場合には、別途、表紙を準備する。【構成編】7　レポートの表紙

序論

1. はじめに

【構成編】3　序論の組み立て方

本レポートでは、安西祐一郎『心と脳――認知科学入門』の 261 頁から 264 頁までを取り上げる。これは「ネットワーク社会のコミュニケーション」について論じられている一節である。

以下では、まずテキストの内容を本文の展開に沿って要約する。そのうえで、「インターネットを介したコミュニケーション」の定義の問題と、直接対話とインターネット上のコミュニケーションの優劣の問題を取り上げ、著者の論点を批判的に検討する。

本論1（要約）

2.「ネットワーク社会のコミュニケーション」の概要

【文章表現編】1～3

著者はここで、直接対話とインターネット上でのコミュニケーションとが、心のはたらきにいかなる違いを生じさせているのか、認知科学の視点から整理している。著者はその違いを三点に分けて説明している。

第一に、知覚される情報の質と量の違いについてである。直接対話では、感情や意図を示すさまざまな情報をえることができる。しかし、ウェブ上のコミュニケーションでは、限られた情報しか得ることができず、それを頼りに感情や意図を受け手が推測しなければならないと著者は述べている。

第二に、意識下のはたらきも違いがあるという。直接対話では身体から情報が入ってくるため、意識下での反応が多くある。一方、ウェブ上でのコミュニケーションはことばや映像を介したものであり、身体はあまり大きな役割を果たさない。そこでは意識下の反応よりも意識的な思考による反応が大きくなりがちである。

第三に、情報を共有する際の心のはたらきの違いがあげられている。直接対話では、表情や行動全体を把握し、状況全体を視野に入れることができるため、情報や感情を共有しやすい。他方で、ウェブ上のコミュニケーションでは情報が限られているため、推論や類推などによって共感を呼びおこしていく機会が多くなると論じている。

本論2（考察）

3. インターネットを介したコミュニケーションとは何か――それは直接対話に劣るのか

【文章表現編】1～3

このように、著者はネットワーク社会のコミュニケーションについて、三つの点をあげてその特徴を論じていた。ここでは、そのうち「インターネットを介したコミュニケーション」の定義の問題と直接対話の優位性の問題を取り上げ、考察を加える。

まず、著者は直接対話と「インターネットを介したコミュニケーション」とを対比させているが、ここで「インターネットを介したコミュニケーション」が具体的に何を意味しているのか、明確な定義が与えられていない。これは問題である。なぜならば、インターネット上でのコミュニケーションには多様な形態のものがあり、なかには直接対話に近いと思われるものもあるからである。たとえば、Skype などのビデオ通信では、表情や仕草などもかなりの程度、相手に伝わる。つまり、インターネット上のコミュニケーションのなかには、直接対話と重なるものもあるにもかかわらず、安西は直接対話とインターネット上のコミュニケーションとを単純に二つに分けて論じてし

まっているのではないかとの疑念が残る。

本論2（考察）つづき

次に、著者はウェブ上の対話と直接対話とを比較し、後者のほうがより円滑なコミュニケーションを可能とすると暗に示唆しているように思われるが、この見解にも疑問を投げかける余地があろう。というのも、1990 年代以降、対面コミュニケーションに対するインターネット・コミュニケーションの優位性を主張する研究が増えているからである。たとえば、杉谷（2010）はそういった研究動向をふまえ、インターネット・コミュニケーションが対面コミュニケーションよりも相手に対する好感を高めやすいこと、自己開示を促進しやすいこと、コミュニケーション上の安心感をもたらしやすいことなどを指摘している。また、表情や声の調子、ジェスチャー、周辺環境などの「非言語的手がかり」は、コミュニケーションの中で限定的な役割しか果たさないというのが近年では定説であると論じている。こういった視点から見ると、安西の見解は非言語的手がかりの役割を過剰評価してウェブ上のコミュニケーションの長所を看過するバランスを欠いたものと映るであろう。

参考文献を使って論点を根拠づける。【構成編】6 引用・参照の重要性
※ただし、参考文献の性質や信頼性に注意。ここでひかれている杉谷（2010）は、インターネット上での医薬品販売解禁をうったえる企業からの依頼で執筆された「意見書」である。著者の専門や研究歴を考えると、一定の学術性はあると思われるが、中立的な資料とはいえない。

結論

4. おわりに

本レポートでは、安西祐一郎『心と脳』の中から、「ネットワーク社会のコミュニケーション」について論じられている一節を取り上げ、内容を要約したうえで二つの点について考察を加えた。まず、「インターネットを介したコミュニケーション」の定義のあいまいさを指摘し、直接対話とインターネット上でのコミュニケーションとを単純に二分して捉えてしまうのは危険ではないかと問題提起をした。そして、近年の研究動向にかんがみると、非言語的手がかりの重要性と対面コミュニケーションの優位性には疑問を挟む余地があると論じた。

インターネット上での交流手段が発達した今日、それにともなってさまざまなコミュニケーション上の問題も生じてきている。いくつかの問題点を指摘はしたが、認知科学の視点からインターネット上でのコミュニケーションの特徴を整理する本書は、そういった問題を理解し、よりよいコミュニケーションのあり方を考えるために概して有用な論点を提供するものである。

【構成編】4 本論の組み立て方

参考文献一覧

課題図書

- 安西祐一郎（2011）『心と脳――認知科学入門』岩波書店.

参考文献

- 杉谷陽子（2010）「インターネット・コミュニケーションと対面コミュニケーションにおける情報の伝わり方の差異についての意見書」http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kaikaku/dai3/siryou3_2_2.pdf （2014 年 6 月 1 日閲覧）.

【構成編】5 参考文献の重要性

（2,193 字）

指示がない場合には文末注や脚注、参考文献一覧なども文字数に含める。